



誠実に生きた女性、 マリア・カラス

音楽研究科修士課程器楽専攻(伴奏) 1年
長井進之介

記事を書かせて頂くにあたり、私の一番好きなオペラ歌手であるマリア・カラスについて書こう、ということはある早い段階で決まった。しかし、ここでカラスの遺した偉大な功績と、歌の素晴らしさについて述べることは、全く意味がないだろう。彼女の多岐に渡る芸術活動は、幸運にも初期LPの全盛時代と重なり、見事に録音されて残っている。それらを聴いて頂くのが一番だ。では、私が私らしく、マリア・カラスについて書けることとはなんだろう…と考

えたとき、一つの映画が頭に浮かんだ。《永遠のマリア・カラス》である。この作品の紹介を通して、カラスの芸術に対する誠実さについて書かせて頂きたいと思う。

この映画は、著名な演出家であり、カラスの親しい友人でもあったフランコ・ゼフィレッツリ監督による、カラスの亡くなる前の数ヶ月にスポットを当てたフィクションである。かつての歌声を失い、隠遁生活を送るカラスに、友人であり、プロモーターのラリーがあり、彼女の全盛期の録音を使ったオペラ映画《カルメン》を製作するという話を持ちかける。最初は「ごまかしを演じろというの!」と反発するカラスだったが、役作りにのめりこむうちに、かつての輝きを取り戻していく…という物語である。映画の中心、そして見所は劇中劇《カルメン》であろう。カラスの歌声と、マリア・カラス役のフアン・アルダンの演技が完全に融合し、カルメンを演じる

カラスを間近で観ているような錯覚に陥る。生前カラスはカルメンを舞台では一度も演じたことはない。しかし、カラスが演じたらきつとこういう演技をしたであろうと思わせてしまうような、見事な完成度なのである。

しかし、この映画でゼフィレッツリが描いたマリア・カラスという芸術家の真髄は、《カルメン》製作シーンから見えるカラスが求める完璧への探究心、そして、映画の完成後、ラリーに対し「私のオペラ人生は幻想ではなかった」と言い切り、作品の破棄を求める凛とした姿にあったのではないだろうか。カラスにとつて、旋律の一つ一つは音楽ではなく、ヒロインの感情そのものであった。そして作品の真実に迫る徹底的なプロローグは、オペラを文字通りの「歌劇」へと進化させたのである。彼女は、グルックやヴァーグナーの行ったオペラ改革を、歌手としてできる最高の形で昇華させたオペラのミューズと言えるだろう。その偉業を成し遂げる為に、彼女は絶えずたゆまぬ努力で才能を磨き上げ、いつでも自分のすべきことを理解して貫き通したが、その代償として、孤独、苦悩、失恋を背負うこととなってしまった。しかし、生

No Image

請求記号●VE 672
『永遠のマリア・カラス』

*発売元: ショウゲート・
販売元: ボニーキャニオン
¥4,935(税込)・発売中
(C)Medusa Film-cattleya-film
and General Productions-
Galfin-Alquimia Cinema-
MediaPro Pictures

参考資料

- ◆『The Callas conversations / Maria Callas. EMI Classics, TOBW-3552 (CD)KAD009●VE 520』
- ◆『ノルマ・歌劇(全曲)』EMI Classics, TOCE-3942~3944 (CD)水戸市立音楽院●XD43375~43377』
- ◆『華麗なオペラ「タバ」Dreamlike』DMI B-30 (CD)水戸市立音楽院●VD1604(紙)

前に「たとえ最悪の夜でも少なくとも私は誠実だった」と語っていた通り、カラスはいつでも作品、そして役柄に対して誠実であり続けたのである。劇中の「心と魂を込めて自分のすべきことをしなさい。決してごまかさなさい」という台詞は、それを的確に表しているのではないだろうか。

この作品は事実を描いたものではない。この物語の中にある晩年のカラスは、ゼフィレッツリの想像によつて生まれた姿である。しかし、この映画からはカラスの一人の人間としての豊かな感情と、絶えず誠実であった芸術家としての生き方が、本当の理解者であったゼフィレッツリの力を得て、丁寧に、美しく描き出されている。彼女の芸術を尊敬し、一人の人間として愛したゼフィレッツリの眼差しの中で生きたマリア・カラスが、ここにいる。

●ながいしんのすけ 生まれ変わったら絶対に歌を本格的に勉強して、オペラ歌手を目指したいです(!?) 声種はソプラノ希望。演じてみたい役は、秘密ですw